序詞　　（これから出すつもりの詩集より）

男が歌っている。
「きっとわたしの運命は
手綱をひいて向きを変え、
人をねたむ歳月も
やがてしあわせ持ってくる」

男の女房も歌っている。
「なにをぐずぐず泣いている。
嘆いていては日が暮れる。
しまいには友もいなくなる
涙を分かつ親友も」

するとみんなも歌っていた。
「あなたの智恵を借りなけりゃ
わたしはとんまな木偶の坊。
この世は正義と縁はなく
あなたにあるのは徳と慈悲」

歌のにがてな男の子
庭に出て摘んでいた、
れんげ、アネモネ、つゆ草、すみれ。

※

花は歌っていた、
子どもの眠っているときに。

言葉

（詩集『エストラゴンの靴』より）

コトバのふりをして　あなたと暮らしました
コトバのふりをしていたのです

文法という骨格をじぶんにねじこみ
質素なレトリックの肉と衣装をはおって

いらっしゃい　さあ
わたしはコトバのふりをして　あなたと暮らします

わたしが何者か　あなたにはわかりません
ことばをとおしてしか　あなたには愛せないのだから

おききなさい　わたしを
雨のふりをして　悲しみが地面にふるように
コトバのふりをして　わたしはあなたと見に行こう
わたしたちの　みるべきものを

耕す人

（詩集『エストラゴンの靴』より）

「腐ったリンゴのように
　　ぶよぶよした時間」
と下書ノートに書いて寝た夜。

果てしなく枝で編んだ空が頭上にひろがる
リンゴ園のまんなか、
葉っぱに見え隠れしてたくさんの実がみのっているのを
ぼくは見た。
赤みをおびた金色の実が
どこまでもなっていて、
農夫が仕事の手をやすめ
その下に立っていた。

朝、パンを囓りながら
その夢を思い出した。
ぼくのなかに、人生をこぼつぼくに向かい
黙って抗議する男がいて、夢のなかを耕しているらしいのだ。

置きみやげ

（詩集『エストラゴンの靴』より）

国語の先生の訃報をきいた日、
ぼくは夢をみた。

夢にあらわれたのは
アフリカの石。
透きとおっていて色がある。
からだのうえに置くとその人の音楽が鳴りはじめる、
という石だった。